

一人称システム分析の構築基盤を評価する

Evaluating the foundation of a first-person-perspective systems analysis

小坂 武(東京理科大学)

Takeshi Kosaka (Tokyo University of Science)

要 旨：組織イノベーションは一般に組織メンバーの相互作用によることが理論的に知られる。このイノベーションには自己の環境を意識化できるシステム分析方法が求められるが、それは従来の三人称システム分析とは異なった一人称システム分析 (1ppSA) である。この 1ppSA に対して、筆者らは現象学をベースに、図的資源に活動理論を使う考えを提案している。それは、システム分析において現象学を活動理論の図的資源を利用して行うことに相当する。本稿は、その方法や図的資源が組織メンバーがおかれる条件や構造の意識化を促進するものであるかを、Dilthey の哲学等で評価する試みを行う。その結果、これらは理論的に有効な方法や資源であることが報告される。

Abstract: It is theoretically known that an innovation in an organization is made by interaction among organizational members in general. For the innovation, there is a need for systems analysis that helps the members be conscious of their environments. The system analysis is considered different from the conventional third-person-perspective systems analysis. We have been proposing an idea that appropriates Activity Theory as diagrammatic resources in doing phenomenology. It means practicing phenomenology with the diagrammatic resources of Activity Theory. In the viewpoint of the philosophy of Dilthey, we examine whether the method and diagrammatic resources help organizational members become conscious of the conditions and structures of the environment. Our theoretical examination shows that they are effective for the consciousness of the conditions and structures.

1. はじめに

経済社会が知識ストックから知識フローへと重点をシフトし、それに伴い知識ワーカーの重要性が高まっている (Deloitte, 2010, p. 10)。経営者から現場への権限委譲が一般的となり、知識ワーカーの裁量が増大している。しかし、システム分析はまだ彼らが行うものとはなっていない。専門家が行うシステム分析に従来以上にユーザ参画する形に留まっている。このような実情は、彼らの多忙さやスキルや知識の欠如と関係するが、実務当事者が使える一人称システム分析 (1ppSA) の考え方と方法が存在しないことに関係していると考えられる。そこで、我々は 1ppSA を、現象学をベースに図的資源を活動理論 (AT) にした方法基盤を提案している (小坂, 2011; Kosaka, 2012)。この基盤の有効性を検証するため、本稿では、W. Dilthey (ディルタイ) の世界観学を参照に、この 1ppSA 基盤が彼がいう世界観を表現出来るかを理論的に検討する。

2. なぜ世界観学を動員するのか

経営組織は複数の考えが対立している場である (フィーンバーク, 1995)。新たなシステムを作るには、人々の間にアコモデーションやコンセンサスが必要となる。しかしながら、折り合うことは容易でなく、自他の考えの構成がどのようになっているかを理解することが、それらを可能にすると考えられている。社会学はこのような互いの理解の必要性を認めてきた。知識ワーカー中心の組織では創造性と生産性を高めるために協働が求められる。歴史は身体と制度に沈殿し、人々はそれに無意識である。これに対し、自己の発想の原点や仕組み、さらに他者のそれらの理解が必要であると社会学は説く。人は、自分自身の行為の諸条件について、また自分たちの社会の総体的な動きについ

て知れば知るほど、自分たちの生活の諸状況により一層影響を及ぼすことができる (ギデンズ, 1993, p. 28)。社会学者の野心は、現在のなかから現在を支配している法則を浮き彫りにすることによって、その法則から自由になることです (ブルデュー, 1991, p. 90)。「教えを垂れることよりも武器を与えること」が社会学の目的だとブルデュー (同) は指摘する。筆者の知る限り知識ワーカーが利用できる武器をまだ社会学は与えていない。その武器を開発するのが筆者らのプロジェクトの目的でその一環に本稿はある。

自身がおかれていると理解している、社会の条件や構造を意識できることが必要であると社会学者は上記のようにいう。これは条件や構造が人々の行動・態度を制約・可能化していることを意味する。

M. Weber (ヴェーバー) は世界像と救いの関係について議論し、世界像が生活態度を制約するという。それは、人間がもつ世界像によっては、救いのあり方は違ってくことを意味する。例えば、「世界はやはり無意味、無価値であるならば、人間は救いを彼方に求めるし、世界に意味や価値があるとすれば、人間は救いを此方に求める。」 (西谷ほか, 2010, p. 996) また、例えば、経営者の能力は経営規模に現れるとの世界像は、多額資金を得ると無関係な多角化を行う態度に繋がる。偏差値が全てだとの世界像を描いている人は、適性や能力とは関係なく、自身の偏差値が高い場合に医学部受験を選択するという態度にそれが表れる。

この世の困難さから人々は世界像を構築し維持してきた。「この世は、貧困、飢餓、旱魃、病気、争い、死といった苦難に満ちている。これは人間の経験則である。とすれば、世界は苦難に満ちている以上、やはり無意味、無価値であるのか。否、それとも、苦難に満ちているにもかかわらず、意味や価値を備えているの

か。ヴェーバーによれば、古来それに対する答えを、人間は「世界像」として描いてきた。」(西谷ほか, 2010, p. 996)「救いの意味や心理的性質からすれば、それが説き知らそうとし、また説き知らすことができたものは、まさしく、そうした世界像とそれに対する態度の問題とかかわっていた」(ヴェーバー, 1972, pp. 57-58)

「人間の行為を直接に支配するものは、利害関心(物質的ならびに観念的)であって、理念ではない。しかし、「理念」によって作りだされた「世界像」は、きわめてしばしば転軸手として軌道を決定し、そしてその軌道の上を利害のダイナミックスが人間の行為を推し進めてきたのである。」(同, p. 58) このことから、我々が取り上げてきた条件や構造は人々の世界像の中に表現されるものと考えられる。

また、Dilthey は人々の世界観が実践の活力を左右するという。「生の謎のなかには一束の問題として我々を困惑させるものがある、それが、世界観により、その問題と解決の意識的かつ必然的な関連にまで高められる。」(ディルタイ, 2010, pp. 495-496) 彼においては、「類型の表現により、生の現実つまり「人間的・歴史的世界」が世界観として理解されうること、類型の識別機能による、諸世界観が識別されうることが、世界観学の基礎である」(西谷ほか, 2010, p. 988)「世界観の諸類型を補助手段として、「生の自己省察」を続けることができる」と(同, p. 993)。

個人は真空のなかに存在するようのものでない。「個々の人間が孤立した存在であるというのは、単なる抽象にすぎない」(ディルタイ, 2010, p. 712) 彼は「カント自身は述べなかった歴史の認識論が彼の諸概念の枠内で可能であるのかどうか」(同, p. 211)と言及し、歴史的制約を受けた理性を取り上げる。「カントのいう理性が人類の普遍的理性であったのに対して、ディルタイのいう理性は歴史的制約を帯びた理性であった。」(西谷ほか, 2010, p. 980) すなわち、カントの純粋理性批判における誰にも共通的にみられるカテゴリにベースをおく人間の思考作用だけに準拠する認識論では不十分であり、人間の「思考と感情と意志」とを、歴史的に制約されてきた人間の、その内部における作用としてとらえる歴史的理性批判が必要だとする。

世界観はその中に世界像を含む。そこで、以下では、Dilthey の世界像と世界観を 1ppSA 基盤の評価のための素材とする。

3. 世界観とは何か

ここでは、世界像と世界観が何にであるかを議論する。Dilthey は世界観を次の意味で使う。「世界認識、理想、規則の賦与ならびに最高の目的規定を含むような、精神的な形成物に世界観という名を適用することが正当化される。」(ディルタイ, 2010, pp. 717-8)

彼の次の表現から、世界観は階層をなしており、三層からなると考えることが可能である。「その(世界観)の構造は必ずひとつの連関である。その連関において、一定の世界像にもとづいて世界の意味と意義への問い

が解かれ、さらにその解決から理想や最高善や処世の最高原則が導かれる。」(同, p. 494) さらに、次の表現からも世界観は三層であると考えられる。「世界観の形態は一見すると偶然的だが、それらのいずれにも同一の目的連関が存在している。この目的連関は、生の謎に含まれているさまざまな問題相互の依存関係、とりわけ世界像、生の評価、意志の目的などのあいだにある不変の関係から生じている。」(同, p. 497)

その階層の第一層は世界像の構築に関わる。「世界観の基底をなすのは常に世界像であり、それは・・・我々の把握的態度から生起する。」(同, pp. 494-495) 把握的態度は、認知的作用であると言えるであろう。

その階層の中間層は感情のもとに行われる「生の評価」に当たる。「諸状態、人々、対象は現実全体との関係において意義を持つし、全体そのものが意味を含んでいるのである。こうした感情的態度という段階を経ることによって、世界観の構造における第二の層が形成される。」(同, p. 495) ここでは部分と全体が相互作用して、しかも自身がおかれる現実世界との関係で、全体が意義を有するようになると考えられる。

その階層の最上層、第三層は「生の理想」を明らかにすることに関わる。「世界観の構造には、生の経験と世界像との内的な関わり、すなわちたえず生の理想を導きだすことのできる内的な関わりがいつも含まれている。」(同, p. 717) ここでは、個人的な生の経験、すなわち歴史性が加わる、そこから理想が生じるとする。この第三層は理想が状態のみを指しているか、理想的な行為を含むかは、明瞭ではない。

この最上層から制約・可能化されるものに実践の活力があるとここでは考える。生の理想が生じることにより、世界観は初めてその実践的な活力を得るとされる。目的の設定、目的と手段の選択などの具体的な事柄に関わることになる。Dilthey 曰く、「生の評価と世界理解から最高の意識状態、つまり理想、最高善、最高の原則が生じ、それらの中で初めて世界観は実践の活力を得る。」(同, p. 495) 次の文章からは、第四層として実践の活力が生まれるようにも読めるが、活力は世界観から生まれるものであって、世界観の一部でない。そのことから、我々は第三層の「生の理想」から水平的に制約・可能化されるものとして、実践の活力があると考える。「この世界観の最上層も、様々な段階を経て展開する。思考や努力や傾向から展開されるのは、なんらかの表象の実現を目指す持続的な目的設定、目的と手段の関係、目的間の選択、手段の選択、最終的にはわれわれの実践的態度の内で最高度の秩序をなす目的設定の総括である。」(同, p. 495)

要約すると、垂直的關係で、世界像 - 生の評価 - 生の理想からなる三層の世界観がある。そして、この生の理想から実践の活力が水平的關係のもと生じるところでは考える。これらから、世界像が世界観の基底として含まれていることがわかる。第二層と第三層は狭義の世界観と考えられる。

世界像は、認知的作用・思考作用によって対象の把

握から生まれる。それに対して、第二層以上にある狭義の世界観では、感情に基づいて生の評価が行われる。この評価結果から生の理想が生まれ、そして生の理想から実践の活力、態度が生まれる。世界像は思考作用によって生まれることから分析的な対象となり得るのに対し、狭義の世界観は価値的な対象である。

世界観はさまざまな条件のもとで展開される。「気候・・・世界観の多様性を生み出す条件となる。」(同、p. 496) その結果、複数の世界観が並立し、「世界観相互の争いは、主要点では、まったく決着していない。」(同、p. 498) その結果、「世界観の間で選抜が生じる」(同、p. 496) こととなる。

Dilthey は世界観学においても類型を重視する。「比較の方法によって言語や宗教や国家のもつ一定の類型、展開経路変遷の規則が認識されるように、同じ事が世界観においても示される。・・・その特性から類型を導出するというのは、構成的方法の重大な誤りであった。歴史的な比較という手続きだけが、類型を提示し、その変動と展開と交錯に接近することができるのである。」(同、p. 497) 「類型の表現により、生の現実、つまり「人間的・歴史的世界」が世界観として理解されるること、類型の識別機能による、諸世界観が識別されるということが、世界観学の基礎である」(西谷ら、2010, p. 988)。そして、類型のもつ識別機能は、「価値表象」でもって、あるダンスやある児童といった「事実表象」を理解させることなのである(同、p. 985)。この類型の考えは、我々の本研究に当てはめれば、1ppSA 基盤が歴史性を捉え、類型を表現できるかどうかという問いをつきつける。

4. 世界観を 1ppSA 基盤はどう表現するか

一人称システム分析(1ppSA)基盤と世界観との関係については今回が初の議論であることから、全ての議論ではなく、世界像と生の評価の分野を対象とする。

現象学にもとづく 1ppSA 基盤では、まずエポケーを行う。これは、改めて自身の世界観の構築がどう行われているかを省察しようとする態度である。例えば、偏差値至上主義になっている自身に気づき、その構成を再構成することにあたる。エポケーで、偏差値至上主義で制約されていた自身の態度に気づければ、それから本人は解放される切っ掛けをつかむであろう。

世界観の基盤である第一層は認知的・把握的作用によって世界像を作ることにかかわる。現象学はこの作用を志向的体験として議論している。フッサールは、この志向的体験をノエシス・ノエマを用いて説明する・・・ノエマ的なものは統一の領野であり、ノエシス的なものは「構成する」働きをしている多様の領野なのである(フッサール、1984, p. 150)。志向性は原風景での意識の働きであるが、それによって生まれる態

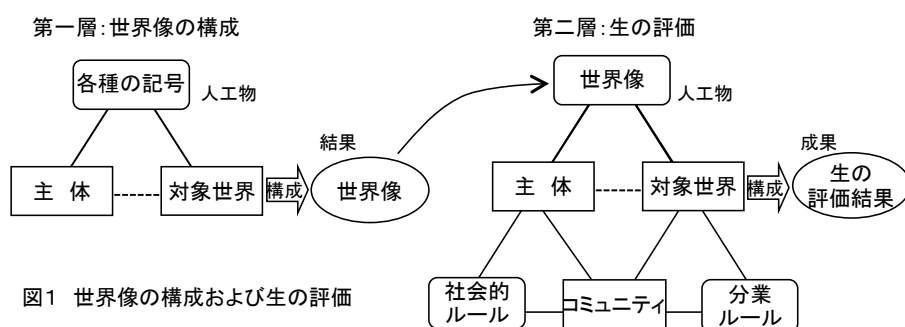


図1 世界像の構成および生の評価

度や行為は構成である。対象領域やツールを構成したり、世界像を構成することをいう。

現象学は現実世界を鏡のように写し取るのではなく、主客の間に現出物なる内在を構成することが基本である。人間の意識では、諸現出を媒介にして現出者が知覚される。これを、フッサールは次のようにいう。素材的な諸体験の「基底の上に」、ノエシス的諸機能を「媒介にして」、「超越論的に構成されたもの」が成り立ってくる・・・(1984, p. 146)。これがノエマである。「・・・ノエマは、内容(=ノエマの意味)を媒介にして対象へと関わる」(同、p. 251)。ノエマそのものが最初から存在するのではなく、ノエマの意味、すなわち、現出を媒介にして内在に構成される。この現出をフッサールは記号とも呼ぶ(谷、1998, pp. 58-59)。

AT は主体と対象との間に人工物なる媒介を入れることで、人間が単なる刺激反応から歴史的・文化的知識を活用する主体になる。AT は媒介を入れることで二元論を超克し、ノエシス・ノエマを実践する理論であると我々は考える(小坂、2011; Kosaka, 2012)。世界観の第一層である認知的作用・把握的作用は、AT 図式では、主体 - 人工物 - 対象からなる小三角形で行うことによって可能である(図1)。主体と対象の間に人工物を入れることで、人工物に歴史性を反映したとらえ方を可能にする。人工物は単に物理的な道具だけでなく、AT では歴史や文化を反映した各種記号でもある。そのことから、各種の人工物、すなわち各種の記号を動員し入れ替え、結果として世界像が構成される。それら動員した人工物であるところの記号・諸現出は、他者によっても動員可能であることから、世界像は他者によっても再現でき批評できるものである。

人工物に対して、現出・ノエマの意味・記号と随時、言い換えているが基本的には同じである。但し、記号そのものであるのか、そこから生まれた意味であるかの幅を有する。人工物や記号は文化を反映したものであり、多彩な記号を動員できるかどうかは、その人の歴史性に依存する。多様な経験や学習をしている人であれば、多彩な記号を動員して対象を深く考察し、豊かな現出物、ここでは世界像を構成できる。例えば、いま、職務を捉えようとしているとき、Hackman ら(1975)の職務充実理論を知る人であれば、記号に職務特性として、スキル多様性、課業の完結性、課業の有意義性、自律性、フィードバックといった記号を動員でき、職務の有り様を深く広く捉えるであろう。

第二層、中間層は3つのことが関係する。第1は実存的分析で自身に関するものである。第2は形相的還元であり、第3は創発である。まず、実存論的分析について。個々の人間が孤立した存在であるというのは、単なる抽象にすぎない(ディルタイ, 2010, p. 712)。我々は、なんらかのコミュニティに棲まい、相互作用により諸状態が生まれる。「諸状態、人々、対象は現実全体との関係において意義を持ち、全体そのものが意味を含んでいるのである。こうした感情的態度という段階を経ることによって、世界観の構造における第二の層が形成される。」(同, p. 495)

我々が、コミュニティの一員であることを、ATは図上に明示的に表し、単なる二元論を超越する。ATはコミュニティの一員として主体を位置付けるだけでなく、社会的ルールと分業に主体がさらされることを図的に表現する。この社会的ルールと分業は、主体とコミュニティ、コミュニティと対象を媒介するものである。そして主体は彼が有する世界像を媒介としての人工物に据え、この3つの媒介のもと自身がおかれる現実や自身の経験を客観的かつ感情的に評価する。そして、生の評価結果としてAT図式の成果箇所世界の意味と意義を構成することが可能となる(ATの大三角形)。

現象学において、「いっさいの還元は、超越論的であると同時にまた必然に形相的でもある」(メルロ=ポンティ, 1967, p. 14)。形相的還元は事実から本質への還元で、空想的な自由変更を通じて本質(形相)を抽出する。形相的還元はこの素材的な諸体験を仮想的なものにまで広げ、内在をより確かなものとする。形相的還元が必要な理由は、「我々の実存はあまりにもびったりと世界の中に取り込まれてしまっているため、世界の中に投げ込まれているそのときにはそうになっている自分を認識することができず、したがって、我々の実存は自分の事実性を認識し克服するためにはまず理念性(本質性)の領野を必要とする」(同, p. 14)。

自身がおかれている社会的ルールや分業を入れ替えたとき、依然として同じ生の評価となるか、あるいは別な世界が展開するか、主体にとっては、諸々の物象化から解放されるために重要となる。例えば、偏差値至上主義にある生徒にとっては、条件を仮想的に入れ替えない限り、新しい意義を感じ取ることはできない。それを現象学とATにもとづく1ppSA基盤は可能にする。すなわち、彼はいまおかれている、あるいは信じている世界観を省察する上で、単に自身の条件や構造を再構成するだけでなく、他の条件や構造に入れ替えたとき、どのような生の評価をするかを試行できる。

第3は生の評価から生まれる意義であるが、それは、対象、人工物、社会的ルール、分業等の部分が集まって生まれる全体としての創発と考えられる。「意義は生のカテゴリの中で最も基本的であるとみなされる。それは、全体に対する生の諸部分の関係の内に成立し、諸部分を結びつける、生に固有な種類の関連である。」(西谷ら, 2010, p. 955) すなわち、「その(世界観)の構造は必ずひとつの連関である。その連関において、

一定の世界像にもとづいて世界の意味と意義への問いが解かれる」(ディルタイ, 2010, p. 494)

5. おわりに

一人称システム分析(1ppSA)基盤として、現象学をベースに図的資源としてATを利用する考えを我々は提案している。その基盤の有効性を検討するために、Diltheyの世界観学を利用した。Weberは、世界像が態度を制約するという。世界観の構造が三層であることを世界観学から我々はとられ、その基底に世界像、その上に生の評価、最上層に生の理想、そしてそれから影響を受けるものに態度があると理解した。今回の研究では、この世界像と生の評価の二段階について、我々が提唱する1ppSA基盤で、その小三角形が世界像の、そして大三角形が生の評価のための図式を提供する。その上で形相的還元の考えが生の評価を可能にすることが明らかとなった。世界観の一部ではあるが、人々が意識すべき条件と構造について、1ppSA基盤がそれを表現できる図式であることを明らかにした。今後、最上層の生の理想、および態度の側面についての表現可能性を探ることが必要となっている。また、今回の検討が理論的な検討であって、実用性については言及していないことを付記しておく。さらに、これらが実現した暁には、複数の世界観を表現できることになり、世界観学で議論される類型を表すことができ、それらの比較への途が拓かれることが期待される。

主要な参考文献

- ・ブルデュー, P. 『社会学の社会学』藤原書店, 1991.
- ・Deloitte, The 2010 Shift Index, Deloitte HP.
- ・ディルタイ, W. (著)、長井和雄・竹田純郎・西谷敬(編集/校閲)『ディルタイ全集 第4巻 世界観と歴史理論』法政大学出版局、2010.
- ・フィーンバーク、A. 『技術 - クリティカル・セオリー』法政大学出版局、1995.
- ・ギデンズ、A. 『社会学』而立書房、1993.
- ・フッサール、E. 『イデーン I - II』みすず書房、1984.
- ・Hackman, J.R., Oldham, G., Janson, R., and Purdy, K., A new strategy for job enrichment. California Management Review, Vol. 17, No. 4, 1975, pp. 57-71.
- ・Kosaka, T., Phenomenology as a Base of Systems Analysis, *Proceedings of MCIS*, 2010.
- ・Kosaka, T., A Foundation of a First-Person-Perspective Systems Analysis, *Proceedings of AMCIS*, 2012 (to appear).
- ・小坂 武「活動理論はシステム分析方法の開発資源になりうるか」経営情報学会 2011 年度秋期全国研究発表大会予稿集, 2011.
- ・メルロ=ポンティ、M. 『知覚の現象学 I』みすず書房、1967.
- ・西谷敬・竹田純郎『「ディルタイ全集 第4巻」解説』法政大学出版局、2010、pp. 923-1004.
- ・谷 徹 『意識の自然』勁草書房、1998.
- ・ヴェーバー、M. 『宗教社会学論選』みすず書房、1972.